

カイクと私

Der Keim und ich

成田 節

東京外国語大学大学院教授

Takashi NARITA

Tokyo University of Foreign Studies, Professor

カイク（Der Keim）第1号は1977年秋に刊行されました。ドイツ語学科研究室代表の野村法先生のまえがきにあるように、創刊の何よりの目的は、東京外国語大学の大学院生に発表の場を与えることでした。「思考は書くことによって一層正確になり、熟してゆくことは間違いありません。」と野村先生はお書きになっています。他人に読んでもらえる論文を書くという行為を通じて、「わかったつもり」を「わかった」にし、さらに「十分に伝える」へと高めることができます。それと同時に、大学院修了後にドイツ語教員として職を得るための業績をつくるという意味ももちろんありました。私も第5号（1981年）と第6号（1982年）に出した2本の論文で、1985年に富山大学教養部に最初の専任ポストを得ることができました。カイクのおかげです。

カイクの発行と密接に関連している事業として、大学院生が夏休みに一般市民向けにドイツ語の授業をするサマースクール — 時代により「夏季セミナー」「サマーセミナー」など名称は変わってきたようです — があります。ドイツ語授業の実地練習をするだけでなく、収入の一部をカイク発行費用の足しにしようというのです。サマースクールがいつから始まったかわかりませんが、1978年の第2号の「研究室だより」には「ドイツ語夏季セミナー開催予定」と記されています。当時東京都立大学3年だった私も1978年の夏季セミナーの中級を受講しました。記憶だよりですが湯浅英男さん（神戸大学名誉教授）と池内宜夫さん（大分大学名誉教授）が講師で、ドイツの雑誌 *Stern* の *Gesamtschule* に関する記事などを読んだと思います。2年後には外語大の大学院に入り、夏に私もサマースクールの授業を担当しましたが、教えることの難しさを痛感させられました。

刊行費用について私は正確な数字を把握していませんが、大学院修了者他多くの方々からのご寄付が大きかったことは言うまでもありません。また、色々な形



で大学からの補助があった年度もありました。現在は、紙媒体から電子媒体への移行という世の中の大きな流れの中で、大学でも紀要や論集の類の電子媒体への移行が進み、慢性的な財政難および大学予算執行期限の厳守化とも関係して、カームは大学からの補助を受けていません。

1992年4月に博士後期課程が新設されましたが、その頃からでしょうか、サマースクールで授業の練習をし、カームに執筆して業績をつくり、ドイツ語教員として職を得ていくという流れが、以前ほどスムーズに行かなくなったように思います。1996年度の第20号の前書きに平野篤司先生が「この間、ドイツ語学ドイツ文学の研究教育をとりまく状況は大きく変わった。」と書かれていますが、1991年の大学設置基準の改正（いわゆる「大綱化」）により、多くの大学・学部で必修科目に位置付けられていた第二外国語が必修から外れることになり、それに呼応してドイツ語教員のポストも最初は徐々に、後には劇的に減少してしまいました。もちろん大学設置基準の大綱化だけが理由ではないでしょうが、結果としては大学院修了後、常勤であれ非常勤であれ、ドイツ語教員のポストを得ることが以前よりはるかに困難になってしまったのです。

さて、2003年度（2004年3月刊）の第27号からカームが大きく衣替えしました。一つは査読制が導入されたことです。1986年度発行の第10号のまえがきで野村先生も言及されていますが、正式な査読制の導入前からドイツ語教室の教員による実質的な査読は（年度により濃淡はありますが）行われていました。実際に私も1982年度の第6号の原稿について、指導教員とは別の先生から手厳しいコメントを頂き、大幅に書き直した覚えがあります。論文は内容が大事なのは言うまでもありませんが、教員採用の応募で提出する業績として、「査読なし」の論文はすでに形式の点で評価が低くなるという世の中の動きに対応したのが査読制の導入だったのです。

次に名簿の記載内容の変更がありました。2002年度の第26号までは、ドイツ語教室のスタッフ、大学院修了者、大学院在籍者の名簿には氏名、住所、電話番号、所属が記載されていましたが、2003年5月に施行された「個人情報保護法」との関係で、第27号の名簿の記載内容は修了・入学年度ごとの氏名と所属のみになり、さらに2004年度の第28号からは、会則に合わせて「通常会員」と「賛助会員」に分け、それぞれあいいうえお順に並べられています。なお、2012年度の第36号からは別刷を挟み込む形になっています。

もう一つの大きな変更点として、「研究室だより」の代りに「研究会だより」が掲載されるようになったことが挙げられます。創刊以来の奥付には「編集発行 東京外国語大学ドイツ語学文学研究会」と書かれていましたが、実質的にはドイ

ツ語学文学（およびドイツ地域研究）を専攻する大学院生の集まりというだけで、「研究会」という組織はありませんでした。そこで当時の大学院生たちが中心となり、カイトの編集発行およびサマーセミナーの企画運営の責任体制を明確にしようと、2004年5月の総会で会則を整備して、形式的にも「研究会」という組織にしたのです。（この辺りの経緯は2003年度の第27号と2004年度の第28号の編集後記に記されています。）元々実質的には大学院生たちが編集発行作業をしていましたが、最後の論文の後ろには教員の組織である「研究室」の近況を記載していました。組織としての研究会を立ち上げたので、研究会および会員の近況（総会、合評会、サマーセミナー、修士論文、学会発表など）を記載するようになったわけです。なお、第1号以来のバックナンバー一覧（著者名と題目）も第27号から掲載されています。

編集後記は創刊以来大学院生（および近い修了者）の編集委員が書いていましたが、このエッセイを書くために代々のカイトをめくっていたら、2013年度の第37号の編集後記を私が書いていたことに気が付きました。今世紀に入ってからドイツ語学文学の大学院生が入学してこない年度もあり、2013年度も在籍者あるいは近い修了者がいなかったか、博士論文執筆などでカイトの編集まで手が回らないという状況だったのでしょうか。カイトの刊行をここで中断するわけには行かないという気持ちから編集作業を手伝ったと記憶しています。

さらに時は流れ、ここ数年でカイトの発行の形が大きく変わりました。DER KEIM のホームページに説明があるように、第39号以来各記事を「東京外国語大学学術成果コレクション」でオンライン公開し、第43・44合併号からは完全オンライン化になったのです。紙媒体での発行は2018年度の第42号（2019年発行）が最後となりました。修了者の方には、冊子が送られてこないのかカイトは廃刊になったのではないかと心配される向きもあるかと思いますが、電子化により刊行費用は大幅に削減でき、カイトを発行し続けるにあたっての費用面での心配は（ほぼ）無くなりました。後は、毎年多くの投稿があることを願うばかりです。

現在、ドイツ語教員の職を得るのは私たちの頃とは比較にならないほど難しくなりましたが、職を得るためにのみ論文を書くのではないはずです。この文章の冒頭に「思考は書くことによって一層正確になり、熟してゆくことは間違いありません。」という野村滋先生の一文を引用しました。論文を書くという営みの意義は、社会の状況がどうであれ変わらないと思います。私は、最初は投稿者として、ドイツ語教員の職を得てからは支援者として、外語大の教員になってからは編集や査読に携わるものとしてカイトと関わってきましたが、定年退職後はまた投稿者としても関わっていきたいと考えています。

